

月の花挽歌 ～2. 酒とバラの日々～

2. 酒とバラの日々

2-1

真紀の好い人だった堀内昌幸は元禄時代から造り酒屋として三百年余り続く『W酒造』の十六代目を継承していた。

W酒造は長野市のJR篠ノ井駅から二つ目にある姨捨駅で降りて直ぐの、善光寺平を見下ろす千曲市羽尾地区に、本社工場と直売所を一万平米余りの地所に構えている。

大型バスも数台駐車可能なパーキング・スペースの脇には、数寄屋造りの売店があり、予約をしておけば、ガイド付きで工場見学もできた。

堀内に銀座のクラブ『こはる』を教えたのは、衆議院議員の清川正三郎で、堀内が長野県酒造組合の新会長に就任した年に、日本酒造組合中央会の会合に出席の為、上京した折であった。

清川の家も、信州の佐久市で元禄時代から造り酒屋をやっている関係もあって、新橋の日本酒造会館で行われた会議の後、堀内が議員会館に正三郎を表敬訪問した際、ひょんなことから、『こはる』へ連れて行かれることになった。

ママの真紀と意気投合したこともあって、それ以来、堀内は仕事に事寄せて上京しては、『こはる』のドアを開けた。

その頃の真紀は、高名な日本画家と、すったもんだの末に別れたことが、マスコミで取りざたされたりして、事態の收拾に苦悩していた。

堀内の五つ年下の妻の貞子は、子宝に恵まれない事も手伝ってか、国際ソロプチミストの会員となってからは、生来の世話好きが高じて、暇つぶしに自ら立ち上げた会社のホームページのネット販売やブログを尻目に、赤いベンツを乗り回して勝手気ままに出かけることが多くなった。使用人達に示しが付かない危惧もあったが、幸いに農業大学で醸造微生物学を修得し、長年務めていた越後杜氏の下で研鑽を積んだ二人兄弟で妹の女杜氏の麻里子が、義姉の尻拭いをしてくれた。

兄弟で十歳離れた妹の麻里子は、大学生当時に、研究室の助手と好い仲になったが、兄が気づいた時は終わっていて、それ以来、浮いた噂はなかった。

麻里子の酒が酒類鑑評会などで、受賞を重ねるようになると、白衣の女杜氏が立ち働く姿が、瓜実顔の美形と相まって、多くのメディアで取り上げられるようになった。

月の花挽歌 ～2. 酒とバラの日々～

2-2

銀座八丁目、並木通りの突き当たりにある『お多幸』は、知る人ぞ知る、おでん通には堪えられない店で、カウンター席、テーブル席、掘りごたつ式の座敷がある。

2007年9月11日。午後6時を回った頃、堀内と真紀の二人は、『お多幸』の座敷で爛酒を酌み交わしていた。

「冷房を効かせての爛酒とは、おかしな様だね」と言って、堀内は真紀の酌を受けながら同意を求めた。

「いまだに真夏日ですからね。でも、信州はもう秋でしょう？」と真紀がおざなりを言うのを嫌って、「冷酒に切り替えよう」と堀内は、わざとがましく言って、この店特有の真っ黒い出し汁から大根をつまんだ。

「冷酒をお願いします」

男の言い草の嫌味まで吸い取って、真紀はインターホンで注文した。

「今日あなたは、妙に色っぽいね！」

堀内は、好い仲になって、まだ半年足らずの女の物分かりの速さに前のめりになっているのを見抜かれるのを隠そうとして、有り触れた物言いの上塗りをしてしまった。

「あら、今日に限ってでしょうか？」

真紀も、しっぺ返しをした。

「チョット待って、チョット待って。こう言う悪者は、私が退治してやるから」

堀内は、お互いにファンを自負する桂枝雀の出し物の中でも秀逸な『一人酒盛り』の一節で、場面は独りやもめの引っ越しに、仲間が手伝いに来て酒を酌み交わす段になり、「俺は素人の酒飲みとは違うぜ」と、上酒に上爛を吹聴する主人公が、飲み加減を試飲しながら、「惜しいな、もうチョットや」と、独り呑み込みするシーンの次に、口に任せて言うセリフの真似事をした。

「大根食べてや。イイダシ吸うてまっせ！」

真紀も、枝雀がそのシーンで言うセリフ、「鱸食べてや」を振って応酬する。

「ナンヤ！その言い草は」

堀内は笑いを押し殺して、強面に出る。

「上等な情婦は、ニョロニョロと、入ってこます」

真紀は自制が効かなくなって、枝雀の「上酒上爛は、酒の方からニョロニョロ入ってくる」のセリフを準えるばかりか、地口までも添えてしまった。

月の花挽歌 ～2. 酒とバラの日々～

2-3

緩んだ会話を下げるように、絶妙な間合いで冷酒が運ばれて来た。

「上爛の落ちが冷酒とはね。枝雀師匠が降りてきたのかな～」

堀内は仰ぐような素振りで囁すと、一件落着とばかりに、真紀とグラスを重ねた。

「ほら、少年の眼差し……」と真紀が冷やかした。

「君は不思議な人だ。君は可愛い人だ」

「あなたはどんな人？」

「信州の山猿」と堀内は言って、おどけた。

「あ、お猿さんの目だ！ すっかり騙された」

真紀は少女のように、お茶目に笑った。

「酒は自信があるんだが、ロマンスには、すぐに酔ってしまう質でね」とはぐらかす。

「ロマンス、もう一献差し上げます」

銀座の一流クラブのママだけあって、転じた話題に、粋なはからいをする。

「チェンジ ザ サブジェクト サンクス」

男がブロークンで突っ込んだ。

「フォーゲット イット！ ロマンス プリーズ」

好い加減の間でボケた女が注いだ冷酒を、男は口に含んだままに女を引き寄せると、狂おしいばかりにディープキスをした。

黄八丈の襟元から忍ばせてくる男の手に任せた女は、「ああ、甘露～」と濡れた唇で男の耳朶を咬んでから、ささめいた。

女の囁きの余韻を、男は再び唇を重ねて楽しむと、女を横たわらせて、乳房から放した手を陰部にすべらせた。

折も折、隣室に客が通されて、途切れ途切れに聞こえてくる話し声に、「中年の男が二人、若い女が二人……」

男は女の耳元で数え唄を歌うかのように来客数を推し量りながら、人差し指で陰核を四回小突いた。

首に絡めている女の腕が締め付けてくるのを潮に、男は女の中にゆっくりと漕ぎ出して行った。

「ディガー ディーン ディーンイエ」

「ドゥサオ ドゥーノ ドムフェウォ」

真紀と重なる度に、女杜氏の妹の麻里子が仕込みの際に酵母に聴かせた『バッハ無伴奏チェロスイート一番プレリュード(ヨーヨー・マの演奏)』の旋律が、高揚が高まるにつれ、決まって堀内の背骨に響いてくる。